

## 自己評価報告書

平成 23 年 5 月 6 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20520637

研究課題名 (和文) 西洋中世の環アルプス圏における移動とコミュニケーション

研究課題名 (英文) Transference and Communication in the Alpine Ring during the Middle Ages in Europe

研究代表者 千葉 敏之 (CHIBA TOSHIYUKI)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：20345242

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：西洋史、中世史、移動、山岳、異文化交流、交通、地図学、峠

## 1. 研究計画の概要

本研究は、ラテン＝キリスト教世界の形成、ヨーロッパの成立にとって重要性をもったアルプス山脈及びその東西南北の山麓地域を《環アルプス圏》と定義し、同圏域を巡る人・物資・文化の移動とコミュニケーションのあり方の分析を目的とする。同圏域に含まれる地方を具体的に列挙すれば、スイス、ブルゴーニュ地方、シュヴァーベン地方、バイエルン地方、ロンバルディア地方、ティロル地方となるが、アルプス山脈を通過する《移動》自体も考察対象とするため、実際にはさらに広い地域が対象となる。アルプス山脈のみならず、アルプスを越えて結び合う山圏を《環アルプス圏》と定義し、これを研究対象空間とすると同時に、アルプス越えという行動自体にも着目し、中世における環アルプス圏の歴史とその全体的構造に迫る。

その際、以下の観点が分析の軸となる。

## (1) 移動経路

アルプスを通過する場合の経路 (ルート) について、入口、峠、出口の位置を確定する基礎作業の他、経由する教会、修道院、王領の位置と、ルート選択の理由を明らかにする。

## (2) 人材の移動

宮廷間、各地から宮廷に集中する人材移動とともに、教会人の移動、とくに 11 世紀の教会改革の時代における改革派修道士の移動、12 世紀における異端運動の伝播過程等、各次元での人材移動を解明する。

## (3) 物資の移動

商人文書が未発達の初期中世に関しては、国王証書、年代記、書簡、地誌等から物資の移動を数量的と同時に質的に把握することが必要となる。この時代の統治システムである移動宮廷が物資を現地で消費する体制であ

ること、また市場経済が未成熟であり、広域の物流が本格化していない状況を踏まえ、物資の移動の「質」の解釈を行う。

## (4) 文化の移動

イタリア都市における書記技術・行政文書作成術がドイツの国王宮廷へ伝えられたケース、(2) に挙げた異端運動の伝播過程、教会改革の導入、修道院間の写本の移動、ローマ巡礼等、文化的・宗教的なインパクトを移動先に与える移動を扱う。

## (5) 移動の政治性

移動そのものが政治性を帯びているケースとして、ドイツ国王のローマ行 (皇帝戴冠)、ローマ教皇のアルプス越え、イタリア王位を兼任する神聖ローマ皇帝のパルヴィア訪問等、アルプスを越えて移動することに高度な政治性が備わる場合を扱う。

本研究では、以上の 5 点を軸に研究をおこなうが、時間的制約から、その前後にも眼を配りつつも 10～11 世紀に焦点を絞り、移動経路と移動実態の正確な把握 (1) を第一目標とする。その上で、(2) のうち、教会人の移動、(4) のローマ巡礼、(5) の皇帝・教皇の移動の解明を、第二の目標と位置づける。

## 2. 研究の進捗状況

本研究 4 ヶ年の計画の骨子は、(1) 移動経路に関する基礎研究とデータベース化、(2) 人材の移動に関する数量的データの構築と人材の質に関する調査、(3) 写本の移動と環アルプス圏修道院 (写本処) の役割、(4) 皇帝の移動経路と証書発給行為の意味づけ、の 4 項目である。計画初年度にあたる平成 20 年度は、(1) の移動経路に関する基礎的分析作業が中心となった。踏査によって得られた地形・旅程に関わるデータをまとめ、それを関

連する史料箇所と照らし合わせ、また既存の研究成果と批判的に照合する作業に着手した。さらに新たな研究課題として、アルプス文化圏からエルサレムに巡礼し、帰国した聖職者や商人が、聖地巡礼の記念としてエルサレムの聖墳墓教会を模した「擬聖墳墓」を建造した事実について調査を行なった。その成果を、他の事例と比較しつつ、論文「都市を見立てる—擬聖墳墓建造に見るヨーロッパの都市観」として刊行した(東京大学出版会、2009年5月)。

第2年目にあたる平成21年度は、前年度に構築した研究基盤をもとに、本格的な調査・史料分析を行なった。とくに、10・11世紀における改革派修道士、聖職者の移動件数、所属・地位、移動理由の調査、10・11世紀におけるローマ巡礼の動向と、アルプス以北の聖俗高位者のローマ訪問の件数と目的に関する調査を中心に行なった。これらの研究活動をもとに、紀元千年における教皇シルヴェステル2世(ジェルベール・ドリャク)の自己形成と経歴、当時の修道院・教会改革運動や神聖ローマ皇帝権、カペー朝王権との関わり、さらには紀元千年の学問知の転回や新たな知の伝播との関係を論じる研究論文を公刊した(東京大学出版会、2010年11月)。

研究計画の3年目にあたる平成22年度には、とくに10・11世紀を中心とした写本の移動・貸借についての調査(書簡史料・蔵書目録の分析)、環アルプス圏に集中する、高度な写本作成技術をもつ修道院の役割についての考究を行なった。

### 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進捗している。

(理由)

「環アルプス圏」という歴史空間=視角から歴史の新たな一面を究明するという本研究の課題は、過去3年間の研究を通じて着実に達成されつつある。その成果はすでに学術図書、研究論文という形で公刊し、世に問うている。ただ文書館での史料調査・移動ルートの実踏調査の過程で新たな課題に直面し、計画を一部修正、あるいはテーマを絞り込む必要が生じたが、これは本研究計画を後退させるものではなく、新たな学問的発見を伴う積極的な修正であると評価することができる。

### 4. 今後の研究の推進方策

本研究計画の最終年度にあたる今年度は、過去3年間の研究成果を踏まえ、またその不足点を補いつつ、下記の要領で行なうものとする。

(1) 10・11世紀を中心とした写本の移動・貸借についてのさらなる調査(書簡史料・蔵書目録の分析)

(2) 環アルプス圏に集中する、高度な写本

作成技術をもつ修道院の役割についてのさらなる考究

(3) 環アルプス圏における修道院の役割の、写本の流通という観点からの総括

(4) オットー朝およびザリア朝歴代皇帝のアルプス越えルートの確定作業

(5) 皇帝の環アルプス圏での証書発給行為の意味に関する分析

皇帝の証書発給行為を、受給者に対する法的恵与という観点だけでなく、現地の文書伝統との関わり、皇帝の統治者としての正統性を顕示する機会と見なした上で意味づけをおこなう。

(6) 4年間の研究の総括として、10・11世紀における環アルプス圏の移動に関するこれまでの成果を総合的に分析し、その全体像を捉え、論文として公表する。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

① 千葉敏之、幽閉と「政治的無害化」の作法—「間」の歴史学から見た中世ポーランド、東欧史研究、30、2008、3-19、査読有

[図書](計5件)

① 深沢克己、千葉敏之(9名中2番目)、東京大学出版会、友愛と秘密のヨーロッパ社会文化史—古代秘儀宗教からフリーメイソン団まで、2010、347、71-108

② 千葉敏之(訳)、講談社、西洋中世奇譚集成—聖パトリックの煉獄、2010、238

③ 立石博高、千葉敏之(11名中1番目)、山川出版社、国民国家と市民—包摂と排除の諸相、2009、301、14-39

④ 高橋慎一郎、千葉敏之(8名中5番目)、東京大学出版会、中世の都市—史料の魅力、日本とヨーロッパ、2009、269、123-150

⑤ 近藤和彦、千葉敏之(17名中1番目)、山川出版社、歴史的ヨーロッパの政治社会、2008、606、3-37